

「たちかわテ米尔」についての評価コメント

東京大学社会科学研究所

玄田 有史

令和2年度から令和6年度に実施された「シャフト・プログラム」の成果を後継・発展させる事業として、令和7年度に「たちかわテ米尔」が新たに実施されたことは、取組効果の持続性の観点からも一定の意義を有すると思われる。ちなみに「テ米尔」とは、「誰かに相談してみる」「興味のあることを探してみる」「自分のやりやすいことから行動してみる」「次の一歩を始めてみる」など、何かに向き合うための行動を示した「…てみる」を「テ米尔」とした独自の造語だという。

シャフト・プログラムが、就職氷河期世代に対する支援に重点が置かれていたのに対し、たちかわテ米尔では、それに加えて孤独・孤立対策就労支援事業として実施されたことから、孤独・孤立状態に置かれた10代から20代前半の若者の存在が、改めて浮き彫りとなったことも重要な発見といえるだろう。

これらの孤独・孤立した若者がなにより求めているのは、就労の前段階として、安心でき、自身の存在を認めてくれる居場所であり、そこから個別相談、就労準備、就職活動につなげていく段階を踏んだ丁寧かつ継続的な支援であろう。受託団体である育て上げネットは、それらの取り組みに長年の実績を有するが、本事業でも居場所支援および個別面談を中心に、利用者の状況に応じた伴走支援を実施し、一定の実績を挙げていると評価できる。

伴走支援については、重要な支援のあり方としてその認識は広がっているものの、実際どのような「伴走」が効果的であるかについては、今後、より具体的な検証が求められる課題でもある。今回の事業からも、ソーシャルファームの活用、学校連携と家庭背景への配慮、本人の興味に応じた外部イベントへの誘導等、伴走のために効果的な興味深い事例が報告されており、今後の検証に資するものとなっている。

同時に課題として分析されている内容のうち、利用者が漠然とした「不安」を抱えていることから、「一歩」を踏み出せない状況にあることも見逃せない発見である。どんなに伴走を丁寧に行ったとしても、不安を安心へと完全に転換することは、実際には難しい。だとすれば、不安が漠然としたものであったとしても、「ここまでもこれは大丈夫」「このままだ」ということが起こるかもしれない」といった、本人が感じられる「リスク」へと適切に転換できれば、一歩を踏み出すきっかけになるかもしれない。

それは、殊更にリスクを強調して、本人に恐怖心や焦燥心を煽ることとは正反対である。たとえば、避けたい未来についての具体的なイメージを伴走者と共有し、それを回避するために今やれるだけのことをやってみる。その結果として、実際に最悪の事態を避けることが続けば、徐々に安心と自信の「一歩」に自然とつながっていく。

最良（ベスト）の状態を実現するのは、誰にとっても容易なことではない。しかし、経験

を積んだ支援者や、地域における理解者という心強い伴走者が複数いれば、避けたい事態は案外回避できるものだという経験の蓄積は、現実的な生きる力となっていく。

孤立・孤独の状態を解消し、社会的に自立するとは、すべてを一人でできるようになることではない。困ったときに何かをし「テ米尔」ことに心よく付き合ってくれる人が、自分の周りには多数いると信じられる状態が続いていること。それこそが、真の自立であり、そして伴走の姿なのだろう。

今回の事業を踏まえて、伴走支援と孤独・孤立支援のあり方について、立川市におけるさらなる発展を期待している。

以上